

## キジル・バシの地

### The Land of Kizil bash

2019年2月25日 安田公男

Feb. 25th, 2019 Kimio Yasuda

URL : [chinggis-ff](http://chinggis-ff)

#### 1. 目的

チンギス・カンはナイマン部族のブイルク・カンと三度戦った。その内二度はキジル・バシ、トルコ語で赤い頭と呼ばれていたブイルクの本領へ攻め込んだものであった。だが、実際にどの範囲までがブイルクの本領であったのか明確でない。又どうしてそのような名で呼ばれたのかもはっきりしないので考察する。なおキジル・バシのキジルの表記は歴史的にも地域的にもキシル、キジル、クズルなどの変化があるが、本稿ではキジルで統一した。

#### 2. 戦いの概観

集史、元史、元聖武親征録（親征録と略）は記述内容に共通点があるので、先ずまとめる。

##### 2.1 一次戦役

テムジンとオン・カンは、1196年のウルジャ河の戦いを契機として金国との提携を行った。以降他部族への攻撃が活発になった。先ずメルキトとの戦いがあったようだが簡単にしか触れられていない。詳しく書かれ始めたのが1199年のブイルク領への侵攻であった。不意を撃たれた形だったのか、ブイルクはケムケムジュート、現在のロシアのトゥヴァ共和国まで逃亡したと集史にある。しかし、ブイルクの兄弟のタヤン・カンの将だったコクセク・サブラクが迎撃し、オン・カンの息子たちが一時苦境に陥った。それをテムジンが救い、無事に本拠地に帰還した。

##### 2.2 二次戦役

ブイルクは領土を蹂躪された恨みを晴らすべく、メルキト部族やジャムカらと連盟してクイテン

で1202年の秋から冬に戦った。だが、逆風雪にあつて惨敗した。この戦場について集史は現在の  
大興安嶺山脈のどこかとするが、筆者はモンゴル北部のダルハンと考えた(1)。

## 2.3 三次戦役

その後テムジン(チンギス・カン)はオン・カンと対立して苦境に陥ったが、それを乗り越えて遊牧種族の統合に成功し、1206年の春にチンギス・カンと名乗ることとなった。その後すぐにブイルク領に侵攻し、余命を保っていたブイルクを捕えて殺した。ブイルクを頼っていた甥のグチュルグとメルキトのカンであったトクトアはイルティシユ河方面に逃亡した。

## 2.4 年次の再確認

集史で一次戦役があったのは1199年である。元史と元聖武親征録(親征録と略)には年次の記載がないが、年次が記され始めたのが壬戌年、即ち西暦1202年であるのでそこから遡ることが出来る。前年の1201年はグル・カンとなったジャムカと戦いがあり、その年次は集史と一致する。そのまた前年がブイルク領進攻作戦である。これは年をまたがった2年間の戦いと考えられるので、その開始年は1199年と考えられ、集史と同じになる。二次と三次の戦役は三書共通に1202年と1206年であり問題ない。

## 2.5 元朝秘史の記述

一次戦役の内容が元朝秘史(秘史と略)の記事で相当するのは158節からである。戊の年(1202)以降のこととされていて、他書より3年以上も遅い。二次戦役は142節からの内容に相当する。その直前にある年次は酉の年(1201)であり年次が他書と逆転している。しかも、敵はジャムカであり、その下にブイルクらがいたように書かれている。即ち1201年のジャムカとの戦いと1202年に行われたクイテンでのブイルクとの戦いをまとめて記述している。三次戦役は書かれていないが、142節の後半部が相当するように思われる。個々の記述は他書と共通する部分が多いが、年次と戦いの区別に違いが多すぎるので、参考にする場合は内容をよく吟味する必要がある。

## 3. 史書に表れる地名

ブイルクとの戦いに関して地名がいくつか出て来る。キジル・バシの範囲を決める上で重要なので下表にまとめる。1・2のような表記は、一時戦役の時に二番目に出て来る地名を示す。ただし二次戦役の地名は本テーマに関係がないので省いた。秘史の年代とまとめ方には信用がおけないが、地名は参考になるので引用する。ただし上で分類した戦役回数には当てはまらないので、142節以降の内容を1-とし、158節以降の内容を2-とした。

表1 集史の地名

史書	地 名	注 記
1-1	アルタイ山付近のキジル・バシ	ブイルク領。
1-2	キルギスのケムケムジュート	ブイルクの逃亡先。
1-3	山	ブイルクの将軍を捕えた
1-4	バイダラク・ベルチル	コクセク・サブラク将軍が戦いを挑んで来た。
1-5	サーリ・ケール	テムジンの帰着場所。
1-6	タタク・トーラ	オン・カンの帰着場所。
1-7	エジル・アルタイ地方	ニルカ・センゲンとジャア・ガンボがコクセク・サブラクに襲われた。
3-1	ウルク・タク（大山）のソゴク河	ブイルクを捕えて殺した。
3-2	イルティシュ	グチュルクとトクトアの逃亡先。

表2 元史の地名

史書	地 名	注 記
1-1	キジル・バシの野	ブイルク領
1-2	高い山	ブイルクの将軍を捕えた
1-3	サーリ河	テムジンの帰着場所
1-4	トーラ河	オン・カンの帰着場所
1-5	クランザンジャ山	カサルがナイマンを大いに破った。
3-1	ウルタ山	ブイルク領
3-3	イルティシュ河	グチュルクとトクトアの逃亡先。

表3 親征録の地名

史書	地 名	注 記
1-1	キジル・バシの野	ブイルク領
1-2	高い山	ブイルクの将軍を捕えた
1-3	バイダラク・ベルチルの野	コクセク・サブラク将軍が戦いを挑んで来た。
1-4	カセウル河？	オン・カンの進軍（逃亡）経路
1-5	サーリ河	テムジンの帰着場所
1-6	トーラ河	オン・カンの帰着場所
1-7	イエディルアルタイ河	カサルがナイマンを大いに破った。
1-8	クラハ山？	イラカの二将がコクセク・サブラクに捕えられた。

1-9	クランザンジャ山	カサルと共にナイマンを大いに破った。
3-1	ウルタ山のサガ水	ブイルクを捕えた。
3-2	イルティシュ河	グチュルクとトクトアの逃亡先。

表4 秘史の地名

史書	地名	注記
1-1	アルタイの南のウルグ・ダク	ブイルクの逃げた方向。
2-1	ウルク・タクのソゴク水	ブイルクの居た所。
2-2	アルタイ山	ブイルクがこれを越えて逃げた。
2-3	クムシンギルのウルング（河）	アルタイを下ってブイルクを追った経路
2-4	キジル・バシ湖	ブイルクをきわめつくした。
2-5	バイダラクの落合	コクセク・サブラク将軍が待ちうけていた。
2-6	カラ・セウル（河）	オン・カンが夜中移動した方向。
2-7	エデル、アルタイ河の落合	カサルがナイマンを大いに破った。
2-8	サーリが原	テムジンの帰着場所。
2-9	セレンゲ河	メルキト人のクトゥとチラウンが目指した場所
2-10	テレゲトウの隘口	オン・カンの輜重があった。
2-11	フラアン・クト	センゲンがナイマンと戦って負けそうになった。

秘史以外の三書では戦役順に同じような名が出て来る。同一と考えられる地名は史書により若干変形しているが、親征録はそれが他書より大きいようである。又、一回しか出て来ない地名もいくつかある。これらの地名で明らかなものから確認していく。

### 3.1 明らかな地名

3.1.1 アルタイ：この山脈名は問題ない。現代の地図を見ると 45N98E 付近で大きく二つに分かれている。北西にロシア、中国国境方向に伸びる高い峰々がモンゴルアルタイ山脈と呼ばれ、東南東に向かってゴビ地帯に伸びる峰々はゴビアルタイ山脈と呼ばれている。

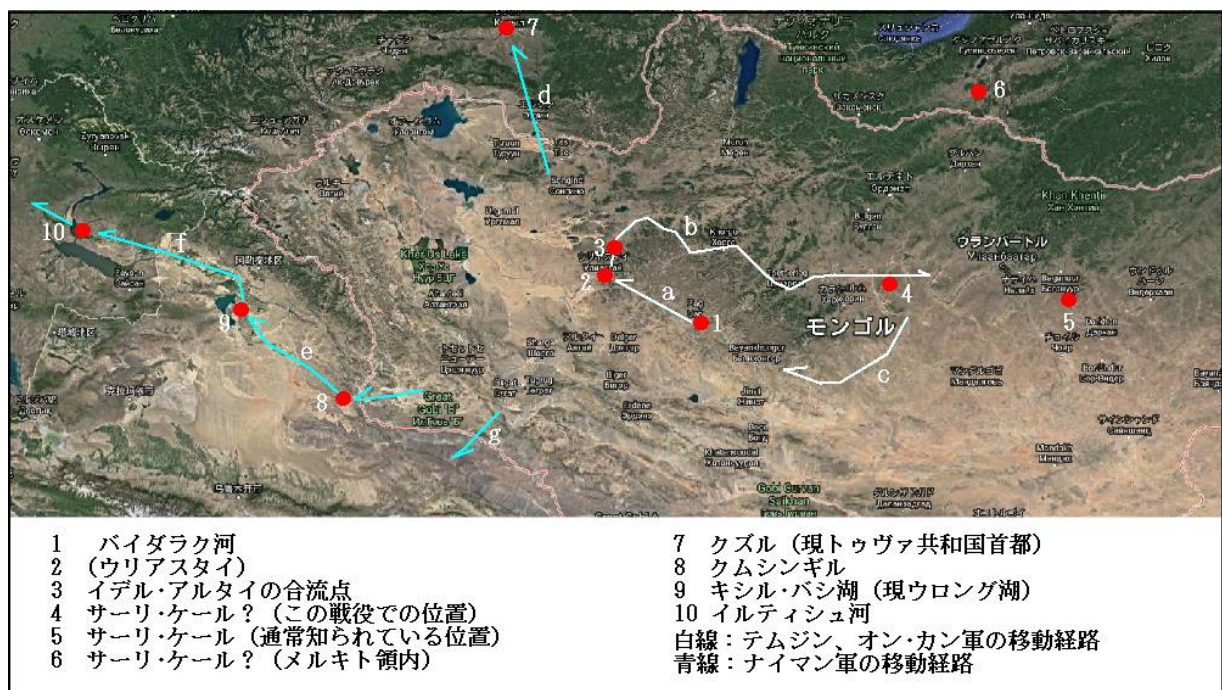
3.1.2 キルギスのケムケムジュート：現在のロシアのトゥヴァ共和国である。首都名は wiki でクズルとなっており、キジル（赤）の音の地方形である。清朝のころはタンヌ・ウリャンハイと呼ばれていた。

3.1.3 バイダラク河：バヤンホンゴル県の中部を南北に流れ、ブーンツァガン湖に流れ込む河である。バイダラク・ベルチルの語のベルチルは「落合い」の訳であり、ザク河との合流点以北の、46.94N99.28E 辺りの平原を言うようである(2)。

- 3.1.4 トーラ河：ウランバートル市内を流れ、オルホン河に合する。オン・カン根拠地であるトーラ河畔のカラトンは首都ウランバートルの西部にあるが、タタク・トーラの地点は不明である。
- 3.1.5 ウルング河のクムシギル：ウルング河はモンゴルアルタイ山脈の西の中国領を南に流れ、モンゴル側から流れて来るブルガン河と合流してから間もなく流れを北西に変える。その辺りのゴビ地帯がクムシギルと呼ばれた所とのこと（3）。45.89N90.46E 辺りである。
- 3.1.6 サーリ・ケール：通常はケルレン河の少し西の、47.40N108.07Eにある土城を中心とした平原で、テムジン主要駐屯地の一つとして知られている（4）。秘史の他の部分にもこの地名が表れるが、同じ場所には思えない。一つはタヤン・カンとの戦いでテムジン軍が展開した場所で、トゥーラ河とオルホン河との間にあったようである。三つ目は、1205年のメルキトとの最終戦に出て来て、メルキト領内のどこかを指している。これらを a、b、c とすると、この戦役でのサーリ・ケールは b のように思える。
- 3.1.7 エデル・アルタイ：秘史では河の落合いまたは合流点とされている。集史では地方名とする。これについて筆者は、イデル河の上流部とアルタイ山脈方面に流れるチゲステイ河の上流部が接近した地点、48.04N97.16E の位置と推定した(5)。
- 3.1.8 キジル・バシ湖：上述のウルング河が北西に流れこむ湖で、現在はウルング湖と呼ばれる。この湖は清朝の頃までキジル・バシ湖と呼ばれていた（6）。

これらの地名と、各軍が移動した経路を図1に示した。

図1



## 4 地名の考察

### 4.1 キジル・バシの地の範囲

テムジン達はバイダラク河でコクセク・サブラクの迎撃を受けながらも、イデルとアルタイの合流点(1)を通過して撤退した。その経路は現ウリアスタイを経る a、b と考えられる。三次戦役でのナイマン勢の逃走経路は各書で e から f である。g の経路は、「長春真人西遊記」で白骨甸を横断する時にチンカイが述べた言葉による(7)。これらの動きから考えると、ブイルクの本領はハンガイ山脈の南、即ち現在のバヤンホンゴル県、ゴビアルタイ県を中心とした地域である。元史と親征録に言うキジル・バシの野はここであったと考えて間違いないだろう。集史にアルタイ山の付近のキジル・バシとあるのも、現在で言うゴビアルタイ山脈の北の意味にとれば同じ地方を示している。とすれば、ブイルクと敵対していた兄弟のタヤン・カンが治めていたナイマン部族の本領は他の人口の多い地帯、現ホブドを中心とするモンゴルアルタイ山脈の東であったと判断できる。

考えなければならないのは、テムジン達の侵攻路の問題である。一時戦役では撤退路の逆の b、a で侵攻して来て、現バヤンホンゴル辺りまで攻め込み同じ道で引き返したとも考えられるが、集史でブイルクが上図 d の方角に逃走したとあるのを信じれば、ハンガイ山脈の南回りの c が考えられる。この経路はゴビに接して水草に乏しく大軍の移動が困難なようであるが、1205年に西夏遠征していることを考えると、その点は既に克服していたのかも知れない。帰り道は冬だったので、水草に恵まれたイデル河経由で帰ったと考えられる。これら二つの可能性があるがいずれか判断できない。三次戦役では動員力も増していたのであらゆる方向から侵攻しただろう。

### 4.2 ウルク・タクのソゴク水（河）

三次戦役において、ウルク・タク、トルコ語で大きな山の付近でブイルクは狩猟していて捕えられている。この山は各書でキジル・バシ地域の象徴のように述べられている。ソゴク水、トルコ語で冷たい又は敵対的な意味の河あるいは湖は、この山と対で述べられている。ペルレーは、これらをホブド西方のボラグ山 (Bulag uul) と、その近くを流れるソゴク河に比定している(8)。だが前節までの考察によれば、これらは現在のバヤンホンゴル県、ゴビアルタイ県を中心とした地域の中になければならない。そのような目で探すと格好の組み合わせがある。バヤンホンゴル市の南140kmにあるイフ・ボグド山 (Ikh Bogd uul) とその北麓にあるオログ湖 (Orog nuur) である (図2)。イフ・ボグド・オールは大きな聖なる山の意味であり、ウルク・タクの意味にボグドが付いた形である。標高はほぼ4,000mで平地との標高差は3,000mある。ゴビアルタイ山脈の最高峰であり、図3の通り平野から屏風のように屹立する長大な山容はこの地域の象徴にふさわしい。麓のオログ湖は湖面が白く見えるほどの濃い塩湖であり結氷状態を思わせる。飲めない水は人にとって敵対的でもある。これ以上にウルク・タクのソゴク水と呼ぶにふさわしい地形の組み合わせはないと思う。

図2 イフ・ボグド山とオログ湖



Ikh Bogd uul

erdenEPÜrev.sh原画

Orog nuur



alamy stock photo より引用

#### 4.3 逃走路 d への疑問

ブイルクがケムケムジュートに逃げたとあるのは集史のみの記載であるので信憑性について考える必要がある。彼が逃走したとすれば図1の a から d の経路であろう。だが、a はテムジン達が帰路で利用したように水草の豊富な道であるので、この方向に逃げるといつまでも追われることになる。一方南に向かって、イフ・ボグド山を越えればゴビの様相を示す土地であり水草は豊かでない。長春真人一行がチンカイ城から漢土へ帰った時にイフ・ボグド山の南側を夏前に通過しているが、一行を五、六人ずつ三隊に分けて、数日間隔で通行しているほどである。すなわち水草のある場所をよく知らないと通行できない土地であり、大部隊では追いかけることができない。こっちに逃げることが断然有利であり、ブイルクはこの方向を目指したと考えるのが妥当である。そうすると、一次戦役でブイルクの先鋒の将であるイエディ・トブルクが捕えられた場所である高い山もイフ・ボグド山であったと理解した方がよい。図3のように、イフ・ボグド山には山越えの道が二か所地図に記載されている。このどれかの道でイエディ・トブルクが攻撃軍を防いでいる間に、ブイルクは南のゴビ地帯に逃亡したのだろう。三次戦役でも多くの者が e や g の方向に逃げたのに、この時だけは d の方向に逃げたとは信じられない。

図3



ブイルクの逃走先とされているケムケムジュートは現ロシアのトゥヴァ共和国であり、首都の名はクズルとなっている。ウイグル語のキジルと同じく赤の意味である。中国の新疆ウイグル自治区にもクズルス・キルギス自治州があつて、クズルスは赤い水を意味する。その他にもキジル千仏洞というのがある。当時もトルコ語圏の各地にキシル又はキジルと名のついた地名が多くあつたので、集史はブイルクの逃走先を誤つたのではなかろうか。

#### 4.4 キジル・バシの名の由来

キジル・バシ湖はブイルクの本領と同じ名前であるので、そこまで彼の勢力が及んでいと判断されやすい。だが、三次戦役でブイルクの甥のグチュルクやメルキトのトクトアはこの方面に逃げたのに、ブイルク本人は逃げなかった。自領と置いていけば自分も逃げたであろうから、キジル・バシ湖地方をブイルクの領土とは考えにくい。ナイマン部族と同じような、ウイグル帝国の流れを汲むトルコ系住民がいたのは間違いないだろう。

キジル・バシの意味は赤い頭である。由来としては、河源が赤い色をしていることや赤い頭の魚が湖にいることなどの説が村上の書に引用されている。もしも、ブイルクの本領に特徴的なキジル・バシと呼ばれる地形、例えば赤く丸い岩山などがあれば、そう呼ばれたかも知れないが、それらしい報告はない。

それよりも、この言葉はイランのサファヴィー朝で戦力の中心となったトルコ系遊牧民を主体とする騎兵集団の名として有名である。添付したWikiの画(図4a)のように、赤い飾りがターバンの上にあつたことからきた名だという。だが、ターバンの白が目立ち赤い頭と言うほどのこともないし、その年代は16世紀である。翻つて現在を見ると、モンゴルに住むトルコ系カザフ族は真っ赤な帽子を被っている(図4b)。かつてキジル・バシ湖と呼ばれていたウルング湖近辺に居るウイグル族もそうである(図4c)。テムジンの時代のしばらく前からトルコ系住民がこういう帽子を常用していたとすれば、土地の名がキジル・バシとなつても不思議ではない。地名も湖の名も住民の被る帽子の色に由来したと考えたい。

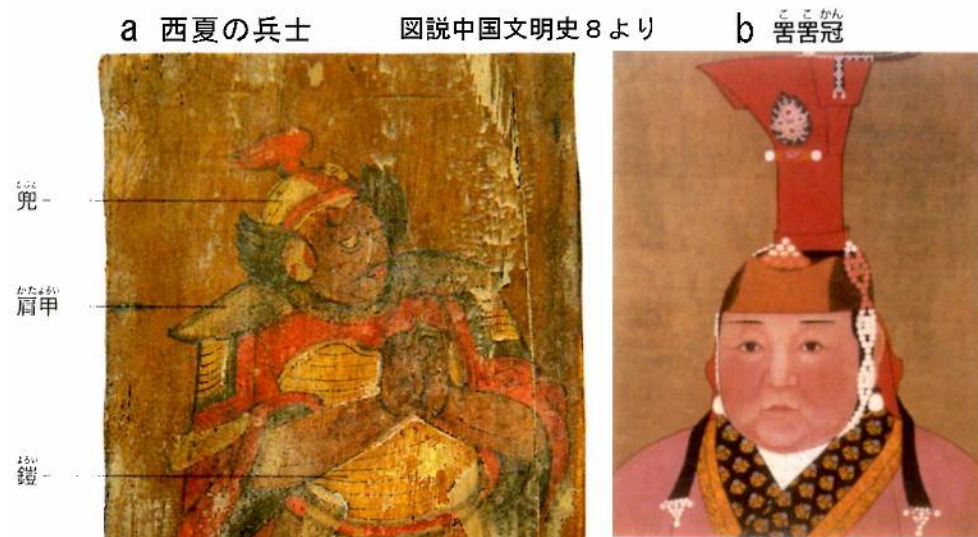


図 4



だが、遊牧民は染色の技術に乏しいから、赤色の素材、恐らく毛織物かフェルト生地は輸入品であろう。赤色を基調とした絨毯でペルシャは昔から有名だったから、ウロング湖方面にいたトルコ系住民に先ず広がっていた可能性がある。それがブイルク領に取り入れられたのかもしれない。又、ブイルク領の南隣の西夏にもチベット方面からの染色技術があっただろう。西夏の軍装が板絵で知られるが、兵士は赤の鎧を着て、兜に赤い突起がある（図 5 a）。ここからの伝播も否定できない。当時、赤色の帽子が西夏やトルコ系住民のファッションだった可能性がある。トルコ系民族が西に広がってイスラムを受け入れた時に、伝統の赤をターバンの上に飾りとして残したのが図 5 a なのだろう。

図 6



又当時のモンゴル貴婦人も丈の高い冠をしていたことで知られる（図 5 b）。モンゴルは男のファッションとしては受け入れなかったが、女性にそれが広まったのだろう。モンゴル本土ではモンゴ

ル化により赤い帽子も廃れてキジル・バシ地名は消滅したが、トルコ系住民の多いウロング湖方面には長く残っていた。だが清朝の影響が強くなった中期以降になって名として消えたのだろう。しかし、今もなお赤い帽子の習俗はトルコ系住民の間に受け継がれている。

#### 4.5 カラ・セウル河

バイダラク河の落合いでテムジンとオン・カンはコクセク・サブラク將軍の迎撃を受けた。翌日戦いを始めることを約束して敵も味方も眠りに着いた。だが、オン・カンはテムジン置いて夜中にカラ・セウル河を通過して撤退した。ペルレーはこの河をバイダラク河北東のハル・スール河としている。ところが、下図の1の地点から北東に進むと帰還すべきウリアスタイに遠くなる上にハンガイ山脈の中に入り込んでしまうので、この方向に進んだとは思えない。考えられるのは、bでグルバン・ブラグ方面を目指す事である。現在の地図ではここまでしか道路表示がないが、その先のaの途中のオトゴン・スムまで行けそうな河が続いている。ザブハン河の上流部の支流でbの後半部を流れる河が、カラ・セウル河ではなかろうか。

図 7



#### 4.6 ジャムカはなぜオン・カンに同道していたか

筆者は先に出した論考で、金史1196年の記事にある障葛なる者はジャムカであろうと推測した。トオリルとテムジンが金国の協力者になった年の冬と推測される。ジャムカは二人のこの行動を快く思わなかったため、反対の気持ちを示す意味で金国侵攻をしたように思える。秘史のわずかな記事によれば、テムジンとジャムカは幼いころトオリルの元において、面倒を見てもらっていたようだ。ジャムカは金国攻撃を知ってトオリルは困った息子だと思ったのだろう。なんとか自分の陣営に彼を取り込もうと思ってブイルク攻撃に彼を連れて行くことにした。だが、ジャムカはその状況に不満で、帰路にオン・カンとテムジンの離間を図ろうとした。だが関係を崩すことが出来ず、その後ずっと敵対し続けた。彼を取り巻く政治的な状況を考えに入れなければならない。

#### 4.7 不明な地点

クランザンジャ山、サーリ・ケール、タタク・トーラ、クラハ山、テレゲトゥの隘口、フラアン・クトが不明点として残る。これらは図1の撤退路bの途中に見出せると考える。

### 5 参考文献

#### <史料>

『集史』：『史集』（1983），商務印書館，北京

：ドーソン著，佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史1」平凡社，東京

『元史』宋濂編：「元史」（1976）中華書局，北京

『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注，文求堂蔵版(1910)，国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全釈、上、下」風間書房，東京

：村上正二(1970)「モンゴル秘史1，2，3」平凡社，東京

#### <研究書>

(1) 安田公男(2017)「クイテンの戦場はどこか」，HP チンギス・カンとその友人たち(chinggis-ff.jp)

(2)、(3) 村上正二(1985)「モンゴル秘史2」84頁，81頁

(4) 白石典之(2001)「チンギス=カンの考古学」86-94頁，同成社，東京

(5) 安田公男(2018)「エデル、アルタイの合流点の位置」，HP チンギス・カンとその友人たち(chinggis-ff.jp)

(6) 村上正二(1985)「モンゴル秘史2」83頁

(7) 安田公男(2017)「長春真人の旅」19-23頁，HP チンギス・カンとその友人たち(chinggis-ff.jp)

(8) ハー・ペルレー「元朝秘史に表れる地・水名を探る」小沢重男著「元朝秘史全釈」の付録

(9) 村上正二(1985)「モンゴル秘史2」84頁，81頁